

博物館だより

第44号

長野市小島田町1414 ☎026(284)9011

第41回特別展

『屋根瓦は変わった～信州の瓦屋と三州の渡り職人～』

11月23日月まで開催中



▲鬼瓦の製造実演

■第41回特別展

『屋根瓦は変わった～信州の瓦屋と三州の渡り職人～』

■期間 10月4日(日)～11月23日(月) ■会場 長野市立博物館特別展示室

私たちの身近にあるがゆえに、普段は気をつけて見ていないものは意外に多くあります。屋根の上に葺か^ふれている瓦もそうしたものの一つに数えられるでしょう。

現在、屋根にのせられている瓦の多くは、愛知県三河地方でオートメーション化によって大量に生産された三州瓦^{さんしゅうがわら}で、県内で瓦を作っている業者は数軒しかありません。

しかし、昭和30年以前には県内に200軒を超える製瓦業者がありました。その頃の瓦は1枚1枚、瓦職人による手作りで、ダルマ窯^{がま}と呼ばれる専用の窯で焼かれました。瓦作りに従事する職人は春から秋にかけての瓦焼きのシーズン中、瓦屋に住み込みで働き、瓦が焼けない冬になると一年中瓦が焼ける三州地方の瓦屋に出稼ぎに行ったり、別の職に就いたりしました。職人は地元の人^{せいが}のほかに三州から来る職人も多く、特に鬼瓦のように特殊な技術を必要とする瓦は鬼板師^{おにいたし}と呼ばれる専門の職人が三州から来て、県内の瓦屋に1～2ヵ月ほど泊まり込み、1年分の鬼瓦を作って回りました。このような職人は渡り職人と呼ばれ、各地の瓦屋を廻りながら自分たちの技術や文化を伝え、また逆にその地域の文化や技術を吸収していきました。言わば渡り職人は瓦の製造技術や文化の伝達者だったのです。しかし、昭和30年代以降瓦作りに機械が導入されるようになってこういった職人の数が減り、それまで職人が形成してきたつながりは急速に失われていきました。

今回の特別展では昭和30年以前の県内の瓦産業に焦点を当て、手作りの頃の瓦を作る道具や、

▼ 寒山拾得の瓦 (森山明治氏蔵)



瓦職人の信仰の対象となった
聖徳太子 (専精寺蔵)



当時の瓦職人たちの生活の様子がうかがえる資料を、長野市周辺にある珍しい瓦とあわせて展示し、あたりまえすぎて見過ごしてしまうことの多い瓦についてその歴史を振り返ります。

(文責 細井雄次郎)

記念講演会

『立花土人形と 鬼瓦職人』

講師 小古井嘉幸氏 (郷土史家)

日時 11月15日(日) 午後2時から

会場 当館2階会議室 聴講無料

実演コーナー

『瓦職人の技』

県内在住の瓦職人の方に実際に手作りで瓦を作っていただきます。

日時 11月3日(火)、7日(土)、12日(木)、
14日(土)、21日(土)

石ころはつまらないものの代名詞のように思われていますが、注意深く観察してあげると自分からいろいろなことを語りかけてくれます。今回の企画展では、石ころが語ってくれる身の上話を聞いてみようというスタイルで石ころの「声」に耳を傾けるコツを学び、身近な存在である石ころに親しみをもっといただきたいと思います。

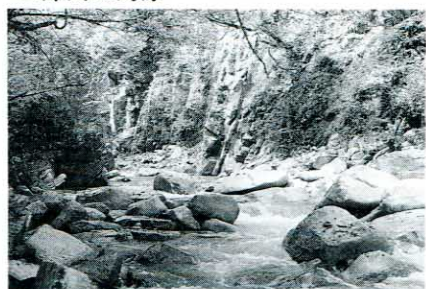
川原の小石のことを正しくは「礫」といいます。礫のふるさとは川の上流の山々です。川は流域の岩石を侵食してできた礫を下流へと運んでいきます。このようにして、下流の川原には上流の山々から運ばれてきたいろいろな礫が集まってきます。ですから、川原に行けばわざわざ山登りにいかなくてもたくさんの山の岩石をあつめることができます。集めた礫の名前を調べて箱などに入れて整理すれば立派な岩石標本セットができあがります。みなさんも川にでかけてみて、図鑑と見比べながら岩石標本作りに挑戦してみてくださいはいかがでしょうか。ひろえる石の種類は川によって違いますので、いろいろな川でやってみるとたくさんの種類がそろえられますよ。

さて、話は変わりますが、大昔の地層には礫岩層という礫をたくさん含んだ地層がみられることがあります。このような礫岩層の多くは、大昔の川の流れによってたまったものです。礫岩層の中の礫を詳しく調べるといろいろなことがわかります。例えば、県庁の近くの裾花川西岸に西河原層という礫岩層を主体とする百数十万年前にできた地層が露出していますが、その礫岩層中にはチャートや硬砂岩や粘板岩といった北アルプス南部に分布している岩石の礫が大量に含まれています。このことは、当時この場所に礫を運んでいた川が現在の犀川のように北アルプス南部方面から流れていたことを示しています。このように、地層の中の礫を各地で丹念に調べれば大昔の長野市周辺の各地で川がどう流れていたかという、当時の風景を知ることができます。さらに、地層中の礫の時代ごとの変化を調べると、どの山地がいつから隆起を始めたのかという地殻変動の歴史さえも知ることができるのです。

(文責 島山幸司)



▲犀川の河原

▲犀川の上流、穂高町中房川の
花崗岩の巨礫

▲岩石標本セットの作例

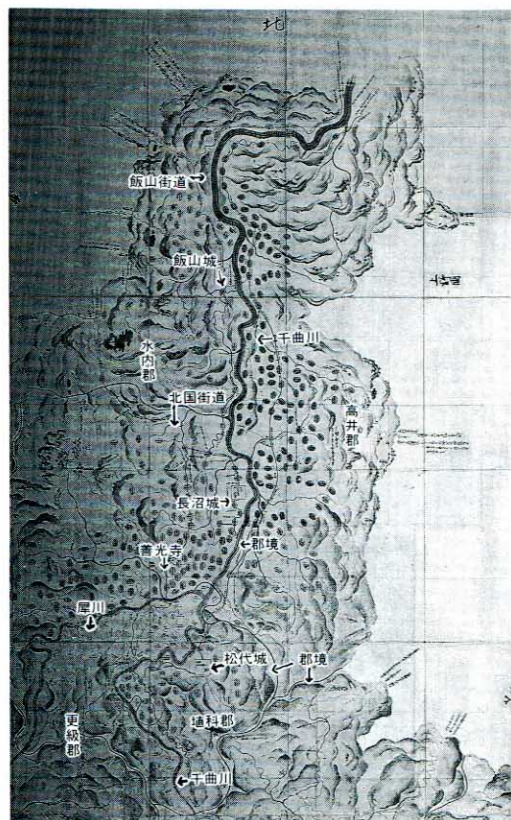


▲西河原層の礫岩層

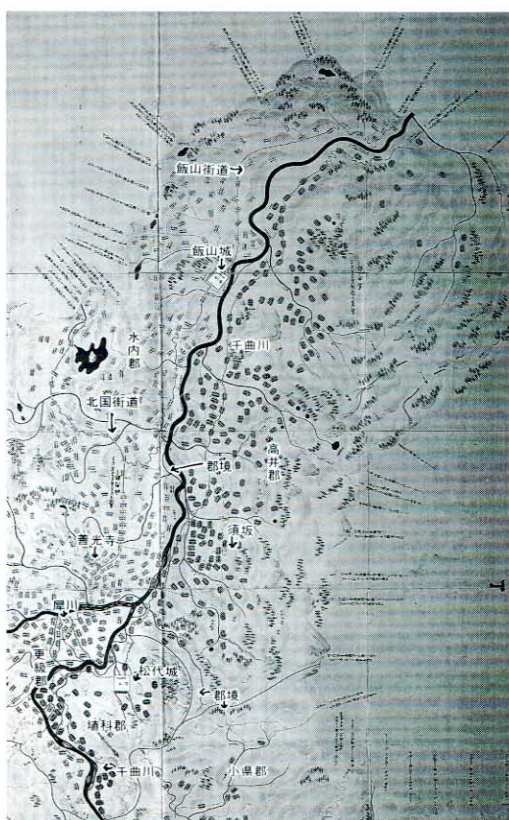
今回は江戸時代の千曲川^{へんせん}の流路^{りゅうろ}を国絵図を通して見てみましょう。国絵図は、幕府が全国の諸大名に命じて作成させた一国ごとの絵図です。下図左側が正保4年(1647)に幕府に献上した絵図の写。右側は天保9年(1838)に幕府が諸大名からの下図^{したず}をもとに自ら作った国絵図です。これらの国絵図は、まず最初に川が描かれ、次に山→道筋→村型、寺社などの図像^{ずそう}→文字の順で書かれています。つまり信濃の骨格は、河川から描かれて決まっていたことがわかります。

さて、下の絵図を見て下さい。図の中に千曲川にそって太い線が北に伸びているのがわかりますか？この線は郡境^{ぐんさかい}を示す線です。よくみると、正保の絵図では千曲川と郡境の線はほぼ同じ所に書かれています。天保の図では千曲川と郡境はだいぶずれています。実は郡境や国境は川の真ん中と決められている場合が多かったのですが、流路は一定ではなく常に変化しているため郡境が変動し、その境をめぐる争論が起きました。そこで18世紀中頃、河川の変動によっても国郡境は変動しないという法則が明示されます。このため天保の国絵図では、かつて千曲川が流れていた流路に郡境の線だけが残し、川はその後の変化で別の所を流れるようになっています。

(文責 降幡浩樹)



▲正保4年(1647)3月 信濃国絵図
上田市立博物館 蔵



▲天保9年(1838)5月 信濃国絵図
国立公文書館 内閣文庫 蔵